

# 終末期の通所介護利用を通して

横浜市

宗教法人善了寺デイサービス還る家ともに

管理者 三根周

## 1 はじめに

還る家ともに に約10年通所されていたチエ子さんが、平成30年6月20日に往生されました。亡くなられる4日前までデイに通ってくれていました。水墨画が得意で、外に出かける事が好きで、なによりも食べる事が大好きな方でした・・・

還る家ともに はお寺のデイサービスとして、開所から約13年が経ちました。介護保険を通してのご利用者だけでなく、様々な立場の‘生きづらさ’を抱えた方々がここを居場所としてきました。そこに集う人々と‘せめぎあって、おりあって、おたがいさま’の関係の中で、デイサービスとして支援するだけでなく、地域のボランティアやお寺のお檀家・ご利用者・ご家族など多くの皆様に多くの場面で支縁され（縁を支えられ）、ともに過ごしてきました。

ときには、終末期をご自宅で過ごしながらデイに通われる方々もおられました。利用しながらだんだんと終末期へ移行していく方もいれば、家庭的な雰囲気ですぐに過ごさせてあげたいという家族の思いから、終末期になってから利用を開始する方もいらっしゃいました。中には、終末期になり他のデイでは、‘体調が安定しないから’との理由で利用を断られながらも、還る家ともに には亡くなる2日前まで通い続けた方もいらっしゃいました。

## 2 事例の紹介

チエ子さんは大正13年生まれの94歳でした。徐々に体力の低下や認知症の進行がありました。健脚がよく歩かれ、本当に食べる事が好きでした。そんなチエ子さんの生活が一変したのが5月中旬。右足の大腿部頸部骨折でした。緊急手術はしたものの、認知症のためリハビリへの理解が難しく5月末にはご自宅へ戻られ、デイの再開となりました。大好きだった食事は入院を機に、咀嚼はするものの嚥下せず吐き出すようになってしまい、食事だけでなく水分さえも摂れなくなってしまいました。また、声掛けへの反応も悪く、呼吸が浅く無呼吸もみられるようになっていました。主治医と連携し、体調が変化しても救急救命は行わず終末期としての対応をしていく事となりました。デイに関しては、チエ子さんの通いなれた場所でなじみの皆さんと楽しく過ごして欲しいというご家族の希望で、継続して通所することとなりました。

終末期にデイをご利用いただくチエ子さんに関わるのは職員だけではありませんでした。馴染みのご利用者の方々は、冷たいものなら食べられるかもとチエ子さんにアイスを手渡してくれたり、10年来になる長い付き合いの中での思い出話を語りかけてくれたりしていました。ボランティアの方々も同様に語りかけてくれたり、手や足をさすってくれたり、チエ子さんの好きだった郷里の歌を唄ってくれたりしていました。チエ子さんとお会いする事の‘有難さ’や、一日一日の‘尊さ’をみんなで一緒に噛みしめながら、ともに過ごしました。

デイに通えなくなっても（その前の終末期となった頃からでしたが）毎日、職員は勤務の前後や休憩時間などに入れ代わり立ち代わりでお見舞いに伺いました。ご家族の介護負担を軽減出来

ればと、その思いを傾聴したり、食事介助や排せつ介助なども行いました。そしてデイに通えなくなると4日目の6月20日明け方にチエ子さんは往生されました。亡くなられた後においても、親交のあったご利用者の方々も職員と一緒にご自宅にお参りに行きました。

職員だけでなく、みんなでチエ子さんとの時間を分かち合うことが出来ました。

### 3 考察

横浜市は、「地域共生社会」の実現に向けて‘すべての市民・関係者が地域の問題・課題を「我が事」として捉え、関わり、支え手・受け手という関係を超えて多様な主体・担い手がつながり、「丸ごと」受け止める場を地域につくる’事を目指しています。

上記の事例でいうと、その‘つながり’‘受け止める’きっかけとしての場が‘地域’のデイであり、終末期を迎える‘チエ子さん’という存在があって、そのチエ子さんの為に何か出来る事はないかと、職員だけではなくご利用者やボランティアといった「多様な主体・担い手がつながり」、みんなで支え合う事ができていたように感じています。そしてそれは、僕たちの「チエ子さんに寄り添いたい」という思いをご本人とご家族が受け入れてくださった、ということでもありました。終末期という限られた時間の中で、チエ子さんに関わらせてもらえる存在であったことは、僕たちにとっては本当に‘有難い’ことでした。勤務時間外のご自宅での関わりでは、ケアプランに縛られることなく、何をしなくても（しても）良い時間のなか、ただただそこに居る事が許されました。それは介護の現場においても侵食し始めている生産性・効率性の観点からすると、無駄な時間かもしれません。しかし、なにもしなくてもいい存在であるからこそゆとりが生まれ、ご家族の心情に沿うことが出来たと思います。それは単に介護保険サービスとしてだけでなく、支え手・受け手という関係を超えて繋がれたからこそ実現できた事だとも感じています。

このように小さなデイサービスであっても、地域の人が集う場をつくり、目の前の人との関係を粗末にしない事で、仕組みづくりからだけではない、関係性から生まれる支え合いの社会づくり、地域共生社会づくりに貢献できる部分もあるのではないのでしょうか。

### 4 おわりに

僕たちは日々迷い、悩みながらケアの現場に身を置いています。率直に言えば、老いの過程で認知症が深くなったり身体的な変化があるなか、僕たち介護職が叩かれたり唾を吐きかけられたりする事もあります。ただ僕たちはそれを問題行動という言葉で一方向的に要介護者のせいにして片付ける事はしませんし、受容という言葉で一方向的に職員に忍耐を強いる事ありません。‘せめぎあって、ありあって、おたがいさま’という理念のもと、‘目の前の方との関係を粗末にしない’との思いを大切に、ケアを実践してきているだけです。お互いさまという関係の下では、僕たち介護職自身もここに集う人々に支援される立場であり、人生の大先輩に認めてもらい、居場所を与えてもらっているのは僕たち自身なのかもしれません。今回、終末期の通所介護としての関わりを発表させて頂きましたが、いろいろな形で地域での支えあいの輪が広がり、それを通じて介護が必要になっても障がいがあっても終末期でも、自分らしくあれる社会が実現出来るよう願っています。